

フ  
ア  
イ  
ン  
ダ  
ー  
越  
し  
に

とにかく男はコンクリートの陰に隠れてカメラを構えていた。いつ来るか分からない弾幕を警戒しつつも、目の前にある銃殺された死体を撮影した。

亡骸の服装は一般市民のものらしい。上着のいたるところが穿たれ、赤黒くなっている。目はぼつちりと開いて口をぼかんとし、股間は濡れているらしく、暗い色合いとなっている。

写真撮影をしているカメラマンのその男は、派手な蛍光色のベストを着ていた。蛍光色の上に戦場記者 という現地語での印字がある。大きなショルダーバッグを肩から下げ、立派な一眼レフカメラを両手に持っている。カメラから伸びる紐は首を抱えている。

彼は辺りをきよろきよろと見回した。銃声の音はない。男は更に目を瞑った。誰かが遠くでし

ているらしい会話の音がする。

男はゆっくりと立ち上がった。再び辺りを見渡す。

廃墟の群がりだった。家の窓ガラスはどこどこと破壊され、建造物の壁も壊れかけていたり、穴が開いていたりする。中には崩れたたものもあるほどだ。生き残った人々のいくらかは道に立って、建物を茫然と見上げていた。生き残った人々のいくつかは、地に臥する死体を横に泣き崩れていた。生き残った人々のいくつかは、適当な方向を向いて、頭を垂れていた。

「もう兵隊はいないのか」

カメラマンは人々の様子を撮りながら、物陰から道に出た。道の真ん中に立ち止まると、破壊された街並みが顕著に把握でき、強力なメッセージを放射している。

「文明が破壊されたかのよう」カメラを自身の顔の前にまで上げ、ファインダー越しの風景を見て、撮影ボタンを押した。「これを人がやってるんだからなあ」

カメラを下ろすと同時に彼は、背後に振り返って、道を歩きはじめた。カメラから左手を離し、腰に付けた羅針盤を手にした。

「アレカの次はグラールレンシユタッド方面かな」腰の高さのコンパスを見下ろしながら独り言する。「まだメモリーカードはあるしな」

男はコンパスを元の位置に戻し、カメラから右手を離した。シオルダーバッグの肩紐を両手で掴んで、早歩き気味に歩き始めた。

男が進む方向は、先ほど見ていたところよりも戦闘が激しかったらしい。かなりの建物が全壊していて、かろうじて立って立っている建造物も穴だらけで、わずかな時間で風化したらしかった。生きた人間の姿は見渡す限りいない。多数に存在する人間の存在は、真つ赤な肉塊や、瓦礫の下から飛び出ている手足ぐらいだ。

男は惨たらしい情景をレンズの中に収めながら歩いてきた。最初は撮影対象を見つかる度に立ち止まって、カメラを持ち上げ撮る。カメラが下りる度に出る男の溜め息。脚を動かさしはじめる。死体を探す男は始終眉間に少しばかりの皺を寄せていた。

「森を得る為だけに、こうやって文化を破壊していいのかな」カメラを構えてファインダーの中の風景を眺めた。

突然瓦礫の崩れる音がした。将棋崩しのように瓦礫が崩れる音の後に、瓦礫を踏みつけて割る音が幾つか。

男は音が消えてから、目をファインダーにつけたまま、音がした方向に向けて首を捻った。

女が立っていた。上品さあふれるジャケットとロングスカートを着用していて、現状の雰囲気とはまったく合致せず、その女だけが別の空気を持っていた。

男は首だけではなく、体をも女に向けた。カメラを離し、「あの」と声をかける。

「大丈夫ですか？」道の際まで近づいて言葉する。「けがとかは、してないですか？」

女がリスの素早さで振り返った。彼女の顔は端正な上にあどけなさもあり、服装の印象からも、

少女、否、令嬢と呼ぶにふさわしい雰囲気だった。その雰囲気に反して、彼女の顔には、土と血が混ざったようなものが一線、頬にこびりついていた。

「ええ、はい」声もやはり弱弱しい。右手をジャケットのポケットに押し込んだ。

男は瓦礫をがしやがしや踏みつけながら、令嬢の許へと進んでゆく。へその辺りでカメラを持ったままである。

「何をしてるんですか？」少女の一メートルほど近くまで近寄った。

令嬢はポケットの中に入ったままの右手を、ジャケット越しに、左手で包んだ。視線もその手を見下ろしている。

「いや、ただ、使用人を」右手をそっと抜いた。その手には何も持っていないようだった。

男は令嬢の足元を見やった。令嬢の足のすぐ傍に、人間の胴体らしきものが埋まっていた。

「そうでしたか」自身の足元を見るようにして目を逸らし、首を小さく左右に振った。「これからは、どうなさるんですか？」足元を見ないように素早く顔を上げた。

令嬢はするとしやがんで、足元の遺体に瓦礫を重ねはじめた。

「これから、グラールレンシユタッドまで」男の方面に歩いてきて、男の横を通過し、道に出る。「急ぎますから」早足気味の足運びだった。

男はカメラから手を離し、その手でばんと一つ手を叩いた。

女性は立ち止まる。

男は少しばかり離れた令嬢の許に駆け寄った。

「僕もこれからグラールレンシユタッドに向かう予定なんですよ」カメラを片手に掲げて見せびらかす。「よかつたらどうです？戦場記者と一緒になら安全ですよ。戦場記者は狙ってはいけないうって戦争規定がありますから」

令嬢は左手で左頬を触り、じいっと硬化する。小さな銃声の群れが聞こえる。彼女は軟化して頷きを二度した。

「いいでしょう」左頬から手を下ろし、右手を上げて、右頬の泥汚れをさすった。

男は左手を握り拳にした。拳を自身の胸骨にぶつけた。鈍い音が三回した。

「僕はカーキ、カーキ・マキアです」握り拳を広げて手を差し出す。「あなたの名前は何ですか」令嬢はしかしすぐに反応せず、眉間に皺を寄せて、細い目をして、視線をカーキからずらしている。上目遣いにカーキを見る。

「私めのは、ダンティシマと」ゆっくりと顔を上げる。「私めは十四歳です。粗相があるかもしれないので、予めご了承を」片方の手の平を胸に当てて、軽くお辞儀をした。

「ファインダー越しに」に興味を抱いていただき、ありがとうございます。

残念ながら、こちらは立ち読み版となっておりますので、ここで終わりです。

もしこの先や、もう一つの作品「一室にて」にご興味のある方は、製品版をご購入ください。

ありがとうございました。

衣谷創